

米国大学図書館における日本研究を担当するライブラリアンの現状

田坂 友希

近年、米国大学図書館における日本研究を担当するライブラリアンを取り巻く環境は変化している。米国大学図書館ではライブラリアンの減少に伴いポジションの兼任化が行われ、それまでほかのアジア研究を担当していたライブラリアンが日本研究の兼任することも増えてきた。また、日本語資料は中国語や韓国語といった他の東アジアの言語の資料に比べても圧倒的に電子化が遅れていると指摘されている。

このような環境において、米国大学図書館にて日本研究を担当するライブラリアンはより効率的なサービスの構築が不可欠となっていると考えられる。そこで本研究では以下の2つの研究目的を挙げる。第一に米国大学図書館にて日本研究を担当するライブラリアンを取り巻く状況を明らかにすること、第二に日本研究支援における課題とライブラリアンのニーズを捉え日本側からの対応を検討することである。

調査方法はWEBサイト調査と質問紙調査、追加調査としてインタビュー調査を行った。まず、東亜図書館協会のホームページと東亜図書館協会による2015年度統計より選出した米国の日本語資料を所蔵する大学図書館51館を対象としてWEBサイト調査を行った。WEBサイト調査では、日本研究を担当しているライブラリアンが存在するか否かを明らかにし、蔵書数、ライブラリアンの職種、分野の専任/兼任の状態等を調査した。次にWEBサイト調査で情報が得られたライブラリアン60名を対象に質問紙調査を行い、17名から回答を得た。追加調査では質問紙調査の回答者を対象に90分のインタビュー調査を行った。

調査の結果、日本語資料を所有する図書館の40%に日本研究を専任しているライブラリアンが存在しており、残りの60%には日本研究以外の何らかの分野と兼任して日本研究を担当しているライブラリアンがいることが明らかになった。さらに日本語資料の蔵書数が多い図書館ほど日本研究を専任しているライブラリアンが存在する割合が高かった。また、ライブラリアンが直面している問題として、日本語資料の電子資料の不足と職務遂行においてライブラリアン個人の知識や言語能力に依存していることが明らかになった。電子化に関しては、回答者全員から日本関連資料の電子化に対する早急な要望がみられた。今後、日本研究を担当しているライブラリアンの離職や他の学問分野の統合などで、現在日本研究を担当しているライブラリアンが変わる可能性は高いと考えられる。日本研究を担当しているライブラリアンにとって有用な研修は、日本国内で行われているが、海外のライブラリアンにとって参加することは難しいと考えられる。ゆえに、国外での日本研究を担当するライブラリアン向けの研修の整備や支援の拡充が必要であると考えられる。

(指導教員 逸村裕)